

# 「ありのままの自分」を表現できる児童の育成

～学級としての成長を自ら追求する活動を通して～

新発田市立御免町小学校 山崎 勝晃（平成 29 年度）

## 【私の主張】

他者とよりよい関係を築く上で、周囲と協調していく力は大切である。私は、それ以上に自分の考えや感じたことを素直に表現する力も大切であると考えている。しかし、学校では、人間関係形成力の向上を意識するあまり、必要以上に児童に調和や空気を読むことを求め、集団の安定を図ろうとしがちである。結果、周囲に気を遣い「ありのままの自分」を出せないでいる児童も多い。そこで、私は異学年交流を含む学習活動を組織し、児童が自分の思いや願いを伝え合い、その姿を互いに認め合うことで、「ありのままの自分」を表現できる児童の育成をめざす。なお、「ありのままの自分」を表現できる児童とは、集団の中でも自分の思いや願いを素直に伝えられる児童である（田中，2025）。

## 1 研究主題設定の理由

私の学級は、一言で言うならいわゆる「落ちついた学級」である。見方を変えると周囲と協調しながら生活することを重視し、周りに合わせることで自分の居場所を作り、集団の安定を保っているとも言える。空気を読み、多数派でいることに安心感を覚える児童が多く、相手を意識した言動が定着している。このような姿は、集団の秩序や落ち着きに寄与しており、「安心・安全な学級」のように見える。しかし、相手を優先しすぎるあまり、自分の思いや願いを素直に表現できず、「ありのままの自分」を出すことに躊躇する児童も多い。その要因として、児童が現状から一步踏み出す機会を作ってこなかったことが考えられる。「学級の楽しさとはなにか」を追求するために、話し合い活動を行ってきたが、相手意識の高い本学級の児童にとっては、学級単位での活動（お楽しみ会等）を成功させることはあたりまえにできるため、なかなか課題意識につながらなかった。このような学級風土が「ありのままの自分」を出せない現状を強めていた。

「ありのままの自分」を表現できないことは、児童の人間関係を表面的なものにとどめ、深い信頼関係や多様な他者と関係を築きながら生きていくことにブレーキをかける。だからこそ、相手意識だけでなく、「自分を大切にすること」も重視し、自分自身の思いや考えを集団の中で気兼ねなく表現できる児童の育成が必要であると考えた。

児童一人一人が自己を肯定し、他者との違いを認め合いながら、学級としての成長を自ら追求していく。このような活動を重ねていくことで、「ありのままの自分」を表現できる児童を育てたいと考え、本研究主題を設定した。本研究では、異学年との交流活動を組織し、話し合ったことを実践し、振り返り、新たな課題解決につなげるよう学習過程を工夫する。また、自分の成長だけではなく、学級という集団の成長に着目させながら話し合い活動を行う。以上の二つの方策によって、「ありのままの自分」を表現できる児童の育成を図る。

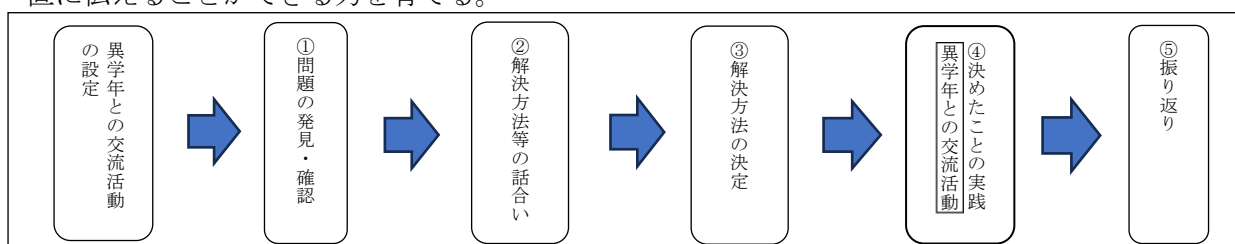
## 2 研究仮説

異学年との交流活動を組み込んだ学習過程を組織し、学級としての成長や個々の成長に着目する話し合い活動を重ねていくことは、「ありのままの自分」を表現できる児童の育成につながるであろう。

## 3 仮説に迫るための方策

### （1）異学年との交流活動を組み込んだ学習過程の組織

小学校学習指導要領解説特別活動編（2017）を参考に、異学年との交流活動を組み込んだ学習過程を作成した。異学年とかかわりたいという児童の思いを出発点として、活動の最終ゴールに異学年との交流活動を設定する。相手意識の高い児童は、「異学年を楽しませたい」という思いをもつ。その思いを原動力に話し合い活動を行い、決定したことを実践し、振り返る。このような学習過程を経験させることで、思いや願いをもちながら活動に取り組み、自分の思いを学級で素直に伝えることができる力を育てる。



## (2) 学級としての成長に着目させた話し合い活動

学習過程の中の「②解決方法等の話し合い」「⑤振り返り」の場面で、学級としての成長に着目させた話し合い活動を組織する。議題に学級としての成長の視点を入れ、学級としてめざす姿を共有した上で話し合いに参加できるようにする。相手意識の高い学級の実態を生かし、活動の対象に対する自分の思いをもち、その思いを表出する場を設定し、ありのままの自分を表現できる姿を育てる。

## 4 研究の対象と検証方法

### (1) 研究の対象

新発田市立御免町小学校

- ・令和6年度 5年3組 26名
- ・令和7年度 6年3組 26名

### (2) 検証方法

以下の方法で方策の有効性を検証する。

- ・抽出児（A児）を中心とした児童の発言内容や活動の様子の変容
- ・抽出児（A児）を中心とした振り返りの記述内容

### 【実践前の学級集団、対象児の実態】

#### 【学級集団6年3組の実態】

人の気持ちに配慮できる優しさをもっており、仲間と協調して行動する力がある。その反面、相手の気持ちを考えすぎるあまり、自分の意見やこだわりを前面に出すことに抵抗感をもっている児童が多い。自分の主張をおさえる場面が多く見られ、話し合い場面においても、必要以上に遠慮し、意見が表面化しにくい傾向がある。その結果、表面的には穏やかでトラブルも少ないが、本音を交わす機会や「ありのままの自分」を共有し合う関係性は十分とは言えない。一人一人が自分自身の思いや考えを集団の中で気兼ねなく表現できる学級に育ててほしい。

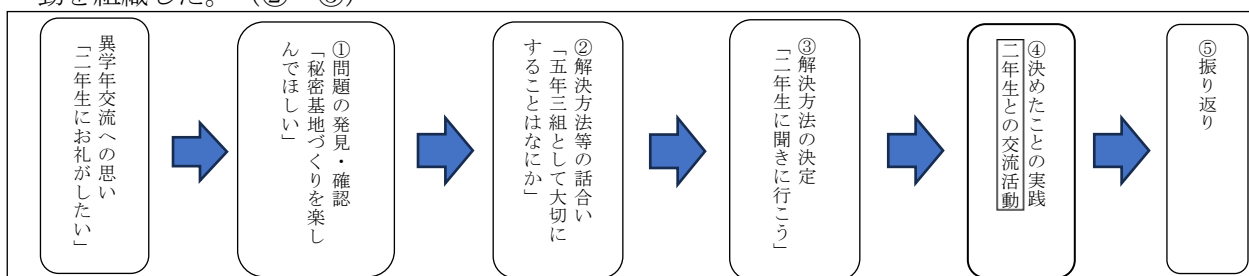
#### 【対象児A児の実態】

失敗や注目されることを嫌う。話し合い活動では、自ら挙手をして、自分の考えを表現することはほとんどない。仲の良い友達とは深くかかわるが、学級全体で協力して活動しようとはせず、消極的である。そのため学級の活動を受け身に捉えることが多い。本来は優しい心をもっていて、相手意識の高い児童である。しかし、学級の前では自分を繕ってしまう姿がある。友達の前でも自分の思いを素直に出せるようになってほしい。

## 5 研究の実際 I 実践1「2年生との秘密基地づくりを成功させよう」（令和6年10～11月）

### (1) 異学年との交流活動を組み込んだ学習過程の組織

「マラソン記録会で応援してもらった2年生にお礼がしたい」という児童の声から、活動のゴールに2年生を招待する交流会を設定した。交流会を行う上での準備や課題についての話し合い活動を組織した。(②～③)



### (2) 学級としての成長に着目させた話し合い活動

2年生との交流活動では、2年生への事前アンケート調査から、一緒に秘密基地づくりをすることになった。「2年生が楽しめる秘密基地づくりのために、学級として大切にすること」について話し合った。

#### 議題「2年生に秘密基地づくりを楽しんでもらうために5年3組として大切にすることは何か」

司会：2年生との交流会を通して大切にしたいことはありますか。

C1：2年生とつながれたと感じられる交流会にしたい。そのために、5年3組の自分たちが楽しみながらも2年生を楽しませることを考えて内容を決めていくといいと思う。

C2：自分たちだけで秘密基地づくりを試したとき、やるが多くて時間がなくなってしまった。だから、何をしたらいいかを決めて、みんなで仕事を分担して準備を進めるといいと思う。

C3：C1さんの意見に付け足して、2年生が楽しめる交流会にするために秘密基地づくりの中で何をやりたいかを2年生に直接聞いて決めたい。(A児) ※A児が本活動で初めて発言した場面

授業後、A児は振り返りに次のように記述した。

**【授業後のA児の振り返りの記述】（一部抜粋）**

・今日の話合いでは26人全員が話すことができた。話し合うときにみんなが真剣に聞いてくれて、とても話しやすい雰囲気だった。これからもみんなで秘密基地づくりのために考え、秘密基地づくりを成功させたい。

自主的に2年生のところに行き、秘密基地にどんな飾りを付けたいか直接インタビューするA児の様子が見られた。秘密基地づくりでは、2年生も自分たちも楽しい時間を過ごすことができた。

**【2年生との交流会後のA児の振り返りの記述】（一部抜粋）**

・楽しさとは何か、これまで学級で考えてきたけど、それを生かして2年生を楽しませることができてよかった。

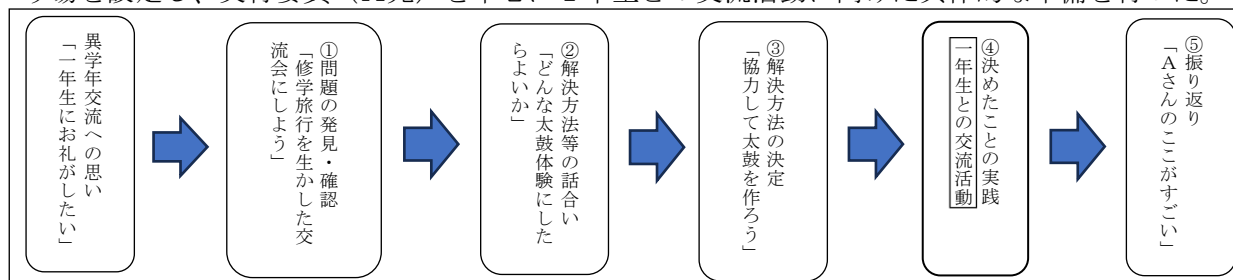
## 6 研究の実際Ⅰ（実践1）の考察

「2年生を楽しませたい」という児童の願いを基に異学年交流を行ったことで、学級の強みである相手意識を最大限に発揮しながら、学級でかかわりあい、活動を進めることができた。A児はこの活動を通して、初めて自分の思いを友達の前で表現できた。集団の中でも気兼ねなく「ありのままの自分」を表現し始めた姿であると評価する。また、A児は話合い後の振り返りの中で、「とても話しやすい雰囲気だった」と記述した。話合いの中で自分の思いを伝え、それを友達から認めってもらったことで友達への信頼が高まったと考える。しかし、実践1では、A児に対する学級の思いが、A児にはなかなか伝わりにくいという課題が見られた。A児が「ありのままの自分」をより表現するためには、A児の思いを学級が受け入れるだけでなく、友達からのA児に対する思いを言葉で伝えることが必要であると考えた。そこで、「**方策（3）友達の活躍を認め合う場の設定**」を加え、実践2を行うことにした。また、実践2では、検証方法に「小学生版共同体感覚尺度アンケート」を加えた。客観的な数値で、検証の妥当性をより高めるためである。

## 7 研究の実際Ⅱ **実践2「1年生に感謝の気持ちを伝えようプロジェクト」（令和7年6～7月）**

### （1）異学年との交流活動を組み込んだ学習過程の組織

「修学旅行のときにお守りをくれた1年生に感謝の気持ちを伝えたい」という児童の声から、活動のゴールに1年生を招待する交流会を設定した。1年生との交流活動に向けた計画を話し合う場を設定し、実行委員（A児）を中心に1年生との交流活動に向けた具体的な準備を行った。



### （2）学級としての成長に着目させた話合い活動

議題「6年3組として1年生に感謝の気持ちをどのように伝えたらよいか」を設定し、話合い活動を行った。「5年生のときに2年生を楽しませたように、1年生に楽しんでもらえる交流会にしたい」「修学旅行で太鼓体験が楽しかったから1年生にも体験してもらいたいし、佐渡のことも知ってもらいたい」という発言に多くの意見が寄せられ、太鼓体験と佐渡クイズをすることに決定した。B児が太鼓体験実行委員に立候補し、その姿を見たA児は、「B児と一緒に頑張りたい」と太鼓体験実行委員に立候補した。A児は実行委員として、学級に思いを伝えるために家庭学習で思いをまとめてくる姿が見られた。実行委員を中心に次のような話合いが行われた。

**議題「6年3組として、1年生に楽しんでもらうためにはどのような太鼓体験にするとよいか」**

司会：（授業前半）1年生に楽しんでもらうためにどのような太鼓体験にしたらよいと思いますか。

C4：1年生が太鼓をもらったときに喜んでもらえる太鼓を作りたい。

C5：C4さんの意見に賛成です。メッセージをいれて気持ちを伝えたいと思います。

司会：（授業後半）・・・これで太鼓の作り方は決まりました。太鼓作りをする必要がありますが、時間がなくなっていました。太鼓体験実行委員は太鼓作りをどうしたいと考えますか。

C6：はい。太鼓の作り方は決まったけど、今は作る時間がないので太鼓体験実行委員は休み時間を使って太鼓作りをしたいと思います。もし、6年3組の中で時間がある人は手伝ってもらってもいいですか。（A児）

C7：できる人みんなでやれたらいいと思う。6年3組として、1年生に楽しんでもらいたいから参加します。

その日の休み時間に学級全体で太鼓を作る姿が見られた。また、家に太鼓をもって帰り、家で太鼓を作ってくる児童もいた。

### (3) 友達の活躍を認め合う場の設定

A児は実行委員として、家庭学習で交流会への思いを事前に記述し準備した。そして、話し合いの中でその思いを学級に伝えたり、1年生との交流会の計画を率先して進めたりした。友達の活躍を認め合う場を設定すると、A児の活動への熱い思いや行動を認める児童が次のように発言した。

#### 【A児に対する他児の記述】（一部抜粋）

- ・ Aさんが考えてくれた太鼓作りのアイデアのおかげで順調に準備が進んでいる。みんなで交流会を成功させたい。
- ・ Aさんのように自分が見えないところでも頑張っている人がいて、自分も真似をしたいと思った。

認め合う場の授業後、A児から「みんなが書いてくれた振り返りを見たい」と申し出があった。理由を聞くと、「自分の頑張りをみんながどう思っているのか知りたい」と話してくれた。翌日、振り返りを讀んだA児は次のように感想を述べた。

#### 【振り返りを讀んだA児の感想】（一部抜粋）

- ・ 振り返りカードを書く時、みんな、私のことをたくさん書いてくれて嬉しかったです。みんないいことをたくさん書いてくれて感謝の気持ちでいっぱいです。

1年生との交流会は、太鼓体験と佐渡クイズで大いに盛り上がり、楽しい時間を過ごすことができた。交流会後に活動を振り返る場を設定した。そこでA児は、「人を楽しませることがどれだけ楽しいことか分かったし、1年生が楽しそうにしてくれてよかった」と学級の前で発言した。

すべての活動を終えた後、A児は次のように振り返りに記述した。

#### 【1年生との交流会後のA児の記述】（一部抜粋）

- ・ 人と協力する大切さや責任感を学びました。自分の行動が周りに影響を与えることにも気づき、良い経験になりました。

## 8 研究の実際Ⅱ（実践2）の考察

A児は、実行委員として積極的に行動し、学級の前で協力を呼び掛ける等、集団の中でも気兼ねなく「ありのままの自分」を表現する姿が見られた。A児の呼び掛けに応じて多くの児童が休み時間に協力した。これは、学級全体として集団の意識が強まり、一人一人が思いをもちながら協力している姿であるといえる。A児は、認め合う場を終えた後、「振り返りに、私のことをたくさん書いてくれて嬉しかった。みんないいことをたくさん書いてくれて感謝の気持ちでいっぱいです。」と振り返っていた。A児が仲間から認められ、「ありのままの自分」を出せたことを肯定的に捉えた姿であると評価する。また、A児は、交流会後の振り返りで、「自分の行動が周りに影響を与えることにも気づき、良い経験になりました。」と記述している。自分の行動が、活動の成功につながったと感じていると考えられる。

実践2の事前事後に行った「小学生版共同体感覚尺度アンケート」結果は、以下の通りである。

#### 【小学生版共同体感覚尺度アンケート結果による学級全体の数値変化】

	6月（平均値）	7月（平均値）
Q1 自分が今いるグループや集団の人たちを信頼することができている。	4.48	4.61
Q2 今、自分がいるグループや集団に自分から加わっている。	4.31	4.57

以上の結果から、多くの児童が学級への信頼感を高め、自分から集団に加わっていると実感していることが分かる。方策（1）（2）（3）によって、「ありのままの自分」を表現する姿につながったと捉えられる。

## 9 結論

抽出児であるA児は、実践1、2の両実践を通して自分の思いや願いを仲間に伝える姿があった。加えて「小学生版共同体感覚尺度アンケート」の結果では、A児や他の児童の尺度全体において優位な上昇を示した。このことから、方策（1）（2）（3）は、「ありのままの自分」を表現できる児童を育成する上で有効な方策の一つであるといえる。

## 10 今後の課題

「ありのままの自分」を表現することが難しい児童も未だ一定数いる。方策（3）を取り入れたが、認め合う場を設定したのは実行委員のA児とB児を対象としたものであった。今後全ての児童を対象にすることで、さらに「ありのままの自分」を表現できる児童の育成を図っていきたい。

## 11 参考文献

- ・ 赤坂真二「先生のためのアドラー心理学 勇気づけの学級づくり」：ほんの森出版、2010年
- ・ 田中翔一郎「学級経営をガラリと変える『超実践的』心理的安全性アプローチ」：学事出版、2025年
- ・ 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」：2017年